

Tyndale's Pentateuch における原典の語順の受容について

—— Genesis を主資料とした調査 ——

橋 本 功

1. Tyndale's Pentateuch の英語と原典の影響

英訳聖書史上初めて原典から聖書の翻訳を行ったのは William Tyndale (c.1492-1536) である。Tyndale は1525-26年に新約聖書を、1530年に *Pentateuch* を、そして、1531年に *The Prophet Jonah* を訳出・出版した。1534年には新約聖書の改訂版と、*Genesis* だけを改訳し他は手を加えないで *Pentateuch* を第二版として出版した。

Marsh (1828:294-96) によれば、Tyndale の時代はヘブライ語の文法が未だ十分に解明されていない時代であったので、Tyndale は Luther 訳聖書や古典語訳聖書 Septuagint や Vulgate などを参照しながら *Pentateuch* を原典から訳出せざるをえなかった。Tyndale's *Pentateuch* (= TP) には確かに誤訳と考えざるを得ない文も存在する。(1a) の “*proceeded forth and*” に対応するヘブライ語は、欽定訳聖書 (= AV) の訳 (1b) が示すように、副詞的機能を有し「再び」の意味を表すが¹⁾、(6a) の Tyndale's *Pentateuch* の訳はヘブライ語表現を英語に逐語訳しただけであり、誤訳である。

(1a) TP: And she *proceeded forth and bare* hys brother Abell (*Gen.* 4: 2)

(1b) AV: And she *again* bare his brother Abel,

また、(2a) の Tyndale's *Pentateuch* の文構造や語順は原典である (2b) のヘブライ語聖書 (= HB) における文構造や語順とは異なる。一方、(2b) から訳出された Vulgate (= VL) のラテン語文 (2c) の文構造は原典とは異なるが、原典の基本語順を保持した跡が窺える。(2d) の Late Wycliffite Bible (= LWB) は (2c) の Vulgate からの間接訳である。この文構造はラテン語文と同じであるが、主語の NP を主語位置に移動して訳出している。これら 2 つの訳文を Tyndale's *Pentateuch* の訳文 (2a) と比較すると、Tyndale's *Pentateuch* では述部の訳は Vulgate の訳を採用し、語順は Wycliffite Bible の訳を採用したと考えることができる。これは Marsh (1862) の指摘のように、Tyndale が Vulgate や Wycliffite Bible などの訳を参照しながら原典を訳出したことの傍証になるであろう。

(2a) TP: and so of the evenynge and mornynge was made the fyrst daye (*Gen.* 1: 5)

(2b) HB: and-was evening and-was morning day one

(2c) VL: factumque est uespere et mane dies unus.

(2d) LWB: And the euentid and morwetid was maad, o daie.

本稿ではヘブライ語文は英語に逐語訳して引用する。その際、以下の記号等を使用する。

- 1) [AM] = 既知の NP でかつ対格目的語であることを合図する形態素 (Accusative Marker)
- 2) ハイフンは以下のいずれかを示す：
 - a) 接頭辞である接続詞。
 - b) ヘブライ語では表現されていないが、動詞の活用形で示されている代名詞主語。
 - c) 接尾辞の代名詞。
 - d) ヘブライ語では1語であるが、英訳では必要となる複数の語。
- 3) ヘブライ語の接頭辞〈ן〉は機械的に and- に置換。
- 4) ヘブライ語では表現されていないが英訳では必要となる語は () でくくる。

また Foxe (1536:514) は、「Tyndale が鋏をもつ少年にもわかる英語の聖書」²⁾を作るために、平易なことばで翻訳することに努めたと述べている。それを示す例として、Pollard (1911:122-31) や Mozley (1937:90-97) は「翻訳に当たっては伝統的な教会用語を使用せず、日常語を翻訳表現に採用した」ことをあげている。この種の翻訳方法以外にも口語に特徴的な間投詞 “tush” (Gen. 3:4) や、当時の文献にはあまり出現しない進行形 (e.g., “ye(=the)camels were cominge.” Gen. 24:63), 特に命令進行形 (e.g., “be wal-kyng” Gen. 12:19) までも使用している。間投詞と命令進行形については、原典にはこれらに対応する表現はなく Tyndale が独自に使用した表現形式である。進行形 “ye(=the) camels were cominge.” (Gen. 24:63) に関しては、ヘブライ語の類似構造に牽引されて出現したものと考えられる。これらも、また、Tyndale が庶民の英語で聖書を翻訳しようとしたことの証左になるであろう。

一方で Tyndale’s Pentateuch の英語には、原典のヘブライ語の呪縛から完全に解放されているとは思えない表現も出現している。

- (3a) TP: And God sawe *the lyghte* that it was good (Gen. 1:4)
- (3b) HB: and-saw Elohim [AM]-*light* that-*it*-was-good
- (4a) TP: and let me fele *the my sonne* whether *thou* be my sonne Esau or not. (Gen. 27:21)
- (4b) HB: and-let-me-feel-*you son-of-me* whether-*you* here (are) son-of-me Esau or-not.

(3a)–(4a) の Tyndale’s Pentateuch の文には、いずれも、目的節の主語が主節の動詞の目的語として余剰的に置かれている。O.E.D. (see, 4b) は (1a) のような余剰目的語を持つ文について次のように述べ、初例を Wycliffite Bible (1382) から引用している。

“The construction with n. or pron. as obj. is sometimes combined with that with an obj.-clause. Now only *poet.* Common in the Bible as literal rendering of a Heb. idiom, but app. also developed independently in Eng.” O.E.D. (see. 4b)

一方で *O.E.D.* (*feel*, 3) は, *feel* が目的節を伴う例を a1300年 (*Cursor M.*) から引用しているが, 余剰目的語と目的節の両方を伴う例は欽定訳聖書の *Gen.27: 21* からの引用である。ただし, この欽定訳聖書の文は, (4a) の *Tyndale's Pentateuch* の翻訳方法を踏襲した文である。*O.E.D.* が指摘するようにこの構造の文は英語においても独自に発達したからこそ, ヘブライ語の余剰目的語を伴った文 (3b) と (4b)³⁾ が *Tyndale's Pentateuch* で受容されたのであろう。しかしながら, *Tyndale's Pentateuch* ではこの構造を持つ文の使用に揺れが見られる。たとえば, (5a)–(7a) は (5b)–(7b) のヘブライ語文の訳であるが, その訳が一樣ではない。(5b)–(7b) のヘブライ語文にはいずれも余剰目的語が置かれているが, (5a) ではヘブライ語の余剰目的語を削除して訳出し, (6a) と (7a) でもヘブライ語の余剰目的語を目的節の主語位置に移動し, 余剰目的語は削除して訳している。

(5a) TP: And whē she sawe that it was a propre childe, (Ex. 2: 2)

(5b) HB: and-she-saw [AM]-*him* that-*he*-was-good.

(6a) TP: he…sawe that rest was good (*Gen. 49: 15*)

(6b) HB: and-he-saw *rest* that *it*-was-good

(7a) TP: But I knowe that *thou and thy servauntes* yet feare not the Lord God. (*Ex. 9: 30*)

(7b) HB: and-*you and-servants-of-you* I-know that-not-yet *you* fear from-before Yahweh god

これらの資料から判断するならば, 余剰目的語を伴う構造は Tyndale の時代には容認可能性 (acceptability) が高くなかったが, この構造が *Tyndale's Pentateuch* に散見できるのはヘブライ語構造に牽引されて出現したと言えよう。

これらの例が示すように, *Tyndale's Pentateuch* には口語的な表現が使用されているものの, 必ずしも原典のヘブライ語から完全に解放された英語であるとは言い難い面もある。これは語順に関しても言える。

2. *Tyndale's Pentateuch* の語順

Butterworth (1941: 231) の統計によると, 欽定訳聖書には Tyndale 訳聖書における翻訳表現が約「18%」取り入れられている。これは語順にも適用できる。*Tyndale's Pentateuch* に起こっている基本語順から逸脱した文の多くは欽定訳聖書に引き継がれ, それらが聖書に特徴的な語順のグループを形成している。ただし, *Tyndale's Pentateuch* と欽定訳聖書との間では, 原典のヘブライ語の翻訳に異なる傾向も見られる。したがって, *Tyndale's Pentateuch* における語順の調査・研究は欽定訳聖書の語順の解明にも貢献することになる。

本稿は *Tyndale's Pentateuch* 全体の語順を明らかにするための予備調査である。

2.1 ヘブライ語の基本語順と *Tyndale's Pentateuch* の語順

ヘブライ語は右から左に書き, その基本語順は「動詞—主語—目的語」である。ヘブライ

語には語、句、文、文章、段落などのあらゆるレベルの単位と単位とを連結する接続詞の機能と、動詞の相 (aspect) を転換させる機能とを同時に持つ接続詞 *waw* <ׁ> がある⁴⁾。この接続詞は1文字からなる。ヘブライ語文の動詞の多くにはこの接頭辞が付加されているので、ヘブライ語の多くの文は「接頭辞 <ׁ> + 動詞—主語—目的語」のように接頭辞から始まる文構造を持つ。近代英語訳聖書、特に、*Tyndale's Pentateuch* や欽定訳聖書では、結合する単位と単位との論理関係がいかなる関係であろうとも、非常に高い頻度でこの接頭辞を *and* に置き換えている⁵⁾。それに次いで多い訳語は *then/than* である。そのために、英訳聖書の散文には *and* で始まる文が多く、それが英訳聖書の文体的特徴的の一つになっている。

(8a)–(10a) は「接頭辞 <ׁ> + 動詞—主語 (±X)」の構造を持つヘブライ語文 (8b)–(10b) の訳である。(8b) には、接頭辞 <ׁ> が動詞の相を転換する機能を特に明示的に表示してあるが、この接頭辞は同時に先行する文と <ׁ> で導かれた文とが何らかの論理的关系にあることを示す機能をも担っている。

(8a) TP: And Noe came out/*ād* his sonnes and his wife (*Gen.* 8:18)

(8b) HB: [<ׁ>][*go*]_{V(Imperfect)}(_{perfect}) Noah and-sons-of-him and-wife-of-him

(9a) TP: Than Abraham came to morne Sara (*Gen.* 23:2)

(9b) HB: and-went Abraham to-mourn for-Sarah

(10a) TP: Than came the maydens forth (*Gen.* 33:6)

(10b) HB: and-came the-slave-girls

ヘブライ語文 (8b)–(10b) はいずれも「<ׁ> + 動詞—主語 (±X)」の構造を持っているが、その英訳方法がそれぞれ異なる。(8a) ではヘブライ語の接頭辞 <ׁ> を *and* に置換し、ヘブライ語の基本語順「動詞—主語」は英語の基本語順「主語—動詞」に変換した訳になっている。(9a) では <ׁ> を *than* に変換し、語順は同じく英語の基本語順「主語—動詞」に変換して訳している。(10a) では (9a) と同じく <ׁ> を *than* に置換しているが、(9a) の訳とは異なり、ヘブライ語の語順は英訳においても保持している。(10a) の語順現象を英語の語順論から説明するならば、「文頭の *than* が倒置を引き起こした語順」である。しかしこれを原典のヘブライ語文の側から説明すれば、「ヘブライ語の語順を保持した訳」である。聖書の原典と比較・対照しながら聖書の英語を調査すると、このように、視点の違いによって複数の説明が可能になる場合がしばしば起こる。このような場合、翻訳者が英語の語順の容認範囲でヘブライ語の語順を導入したか、あるいは、ヘブライ語の語順が英語の語順の容認範囲内にあったのでヘブライ語の語順に牽引されたとする説明が妥当であろう。なぜならば、聖書翻訳の歴史から判断すると、聖書翻訳には一般に原典の言語構造を可能な範囲において翻訳言語に導入しようとする力が働いているからである⁶⁾。ただし英訳聖書においては容認可能性の範囲は他の翻訳において行われる選択よりも広いのが特徴である。このような翻訳においては、言語構造が持つ情報伝達に歪みが生じることは言うまでもない。

(11a) ではヘブライ語の接頭辞 <ׁ> を副詞句 “*After thys*” に置換し、“*there*” を挿入した後にヘブライ語の基本語順を保存させた訳である。(12) と (13) においても同様の方法による訳が行われている。これらは原典の語順を保持して英訳する方法の一つである。

- (11a) TP: After thys there came a derth in the lande. (*Gen.* 12:10)
 (11b) HB: and-was famine in-the-land
 (12) TP: And there fell a stryfe betwene the herdmen of Abrams catell / and the
 herdmen of Lots catell. (*Gen.* 13:7)
 (13) TP: And *there* shall aryse after them vij. yeres of hunger. (*Gen.* 41:30)

一方において、(14a) は (11a), (12), (13) と同じく introductory *there* に導入された構造の文に見えるが、(14a) の “there” はヘブライ語文 (14b) の「場所の副詞」を文頭に異動させた文であり、いわゆる introductory *there* ではない。

- (14a) TP: And there called Abram vpon the name of the LORde. (*Gen.* 13:4)
 (14b) HB: and-called *there* Abram…

また、(15a) の文の場合はやや事情が異なる。ヘブライ語の語順は「動詞—主語 (±X)」であるが、(15b) のヘブライ語文は、主語の NP を強調するために、この NP を主語位置から文頭に異動させた文である。これに対する Tyndale's Pentateuch の訳では、*there* 挿入を行い、新情報を文末に置く英語の語順に変換した訳になっている。ヘブライ語と英語の間では文の基本語順が異なるために両者間での翻訳が情報伝達の仕組みを歪ませた例である。このように (15a) の “there” は (14a) の “there” とは異なる。これは英訳聖書の文構造を原典の文構造と比較・対照して精査しないと見えてこない現象である。

- (15a) TP: But *there* arose a myste out of the ground (*Gen.* 2:6)
 (15b) HB: and-mist went-up from-the-earth

2.2. Casus pendens による語順の受容

Casus pendens とは「文中の NP を文頭に外置させ、NP が置かれていた場所に NP の代名詞を置く」構造である⁷⁾。これはヘブライ語では文中の NP を強調するための構造であり、聖書では頻繁に用いられている。(16a) では文頭の NP が代名詞 “she” で繰り返されているが、これが (16b) の casus pendens の直訳によって Tyndale's Pentateuch に出現したヘブライ語法である。

- (16a) TP: *The woman which thou gavest to bere me company* she toke me of the tree /
 (*Gen.* 3:12)
 (16b) HB: *the-woman whom you-gave with-me* she has-given to-me of-the-tree

前置された NP の繰り返しは、代名詞ではなく NP である場合も希にある。このヘブライ語法を反映しているのが (17) である。(17) ではヘブライ語の忠実な訳によって “that soule” が前置された NP の跡を埋める代名詞の代用として使用されている。

(17) TP: For *whosoeuer eateth leuended bread from the first daye vntyll the .vij. daye, that soule shall be plucked out frō Israel.* (*Ex.* 12:15)

ヘブライ語の casus pendens で前置された NP が主語である場合は、*Tyndale's Pentateuch* ではその NP と代名詞の両方を保存する例が見られるが、前置された NP が目的格あるいは属格の場合は casus pendens によって生じた構造を避ける傾向が強い。これは、Casusu pendens を保存する傾向がある欽定訳聖書と異なる点である。(18b) は前置された NP が目的格である casus pendens の例である。このヘブライ語文に対する *Tyndale's Pentateuch* の訳 (18a) では代名詞による繰り返しを避けているが、(18c) の欽定訳聖書の訳では代名詞を保持している。ただし、*Tyndale's Pentateuch* では casusu pendens の構文の訳では、代名詞は削除するが前置された NP は保持して訳する傾向が強い。

(18a) TP: *all the lande which thou seiste wyll I gyue vnto the & to thy seed for ever.*
(*Gen.* 13:15)

(18b) HB: AM-~~all-the-place~~ where you see to-thee I-will-give-it

(18c) AV: *all the land which thou seest, to thee will I give it, and to thy seede for euer.*

2.3. パラレリズムによる語順の受容

旧約聖書の文章構成法の特徴の一つにパラレリズム (parallelism) がある。Berlin (1985) はパラレリズムの多様な型について述べているが、本稿で関係があるパラレリズムは (19b) のような語順を利用したパラレリズムである。(19b) は2つの文からなる。2つの文は基本的な意味は同じであるが、文の構造上は、最初の文は前置詞句で終わり、2番目の文が前置詞句で始まっている。すなわち2つの文の構造がほぼ対照的あるいは交差配列 (chiasmus) をなしている。(19a) の *Tyndale's Pentateuch* の訳では、第1番目のヘブライ語文の「動詞—主語」の語順は英語の語順に変更しているが、「最初の文は前置詞句で終わり、2番目の文が前置詞句で始まる」という語順を保持している。

(19a) TP: And God created man *after hys lycknesse* / (*Gen.* 1:27)

after the lycknesse of god created he him :

(19b) HB: and-created Elohim AM-the-man in-image-of-him [V NP NP PREP]
in-image of-Elohim he-created AM-him [PREP NP V NP]

しかしながら *Tyndale's Pentateuch* では、一般的には、パラレリズム形成のために生じた語順の乱れを出来るだけ英語の基本語順に変換して訳出しようとした跡が多く見られる。(20b) のヘブライ語文では2つの文の間で、day と night, light と darkness の意味上の対立、及び、前置詞句の語順の交差を利用したパラレリズムを形成している。*Tyndale's Pentateuch* ではこのパラレリズムの形成による語順を無視して英語の基本語順に変換している。一方、欽定訳聖書の訳 (20c) では原典の語順を温存しようとする姿勢が見られる。これもまた *Tyndale's Pentateuch* と欽定訳聖書の間に見られる翻訳傾向の相違点の一つで

ある。

(20a) TP: /God……and called the lyghte daye / and the darcknesse nyghte: (*Gen. 1:5*)

(20b) HB: and-called Elohim to-light day
and-to-darkness he-called night

(20c) AV: And God called the light, Day, and the darknesse he called Night:

2.4. ヘブライ語と英語の混交語順について

(21a) の文はイタリック体で示した複主語 (compound subject) が動詞 “went” によって分割されている。類似の例はすでに中英語訳聖書の Wycliffite Bible (21d) に出現している。(21a) は (21b) のヘブライ語文の訳であり、(21d) は (21e) のラテン語文の訳である。さらに (21e) のラテン語文は (21b) のヘブライ語文の訳である。このことは、英語にこの型の文が出現した原因はヘブライ語文とラテン語文の2種類存在することになる。まず、英語にこの語順を出現させた (21b) と (21d) との関係について述べる。(21b) のヘブライ語文では主語が複主語であるにもかかわらず、動詞は三人称・単数・男性形をとっている。これはヘブライ語ではたとえ主語が複主語でも、動詞は複主語を構成する第一番目の NP、すなわち、動詞に一番近い NP と呼応するのが一般的であるためである。(21e) ではこの呼応がラテン語に逐語訳され Vulgate に引き継がれている。したがって、Tyndale's Pentateuch の呼応現象も Wycliffite Bible の呼応現象も (21b) のヘブライ語の呼応現象に起因することになる。

(21a) TP: and Noe went *and his sonnes and his wyfe and his sonnes wyves wyth hym* /
in to the arke (*Gen. 7:7*)

(21b) HB: and-[went-in]_(VERB:3.S.M)[*Noah and-sons-of-him with-him and-wife-of-him and-wives-of sons-of-him with-him*]_(SUBJECT) into-the-ark

(21c) AV: And Noah went in, *and his sonnes, and his wife, and his sonnes wiues with him, into the Arke,*

(21d) EWB: And Noe is gon ynne, *and his children, hys wijf, and the wyues of his children with hym into the arke*

(21e) VUL: et ingressus est Noe *et filii eius et uxores filiorum eius cum eo in arcam*

さて、(21a) と (21d) の語順が英語に出現した原因は、ヘブライ語の呼応現象を英語の文法に照らして翻訳したところにあると考えられる。すなわち、翻訳者はヘブライ語あるいはラテン語の「動詞—主語」語順を英語の「主語—動詞」語順に変換して訳するために、動詞と呼応している NP だけを動詞の前に移動し、残りは原典の語順をそのままにして英語に訳した。その結果、英語に (21d) と (21a) の語順の文が出現した。この語順の文が英語に出現したのは c1384 の Wycliffite Bible が最初ではなく、(21e) から訳出された Ælfric の古英語訳聖書 (= OEH) にすでに出現している。

(21f) OEH: *ða Noe eode in to ðam arce, 7 his ðry suna 7 his wif 7 his sun wif*
 (Gen. 7: 7)

ヘブライ語の「動詞—複主語」の呼応に対するこの種の訳は、古英語訳聖書に遡ることが明らかになった。この翻訳方法は欽定訳聖書で一般的になるが、(22a) と (23a) の例示のように *Tyndale's Pentateuch* ではどちらかと言えばこの種の語順を避け、基本語順に変換して訳する場合が多い。

(22a) TP: and so shall *I and my house* be dystroyed. (Gen. 34: 30)

(22b) AV: and *I* shal be dystroyed, *I and my house*.

(23a) TP: / the *mē* were let goo with their asses. (Gen. 44: 3)

(23b) AV: *the men* were sent away, *they, and their asses*.

3. 終わりに

従来近代英語訳聖書の言語研究は、欽定訳聖書の及ぼした影響が強いために、欽定訳聖書が中心であり、欽定訳聖書に翻訳上の影響を及ぼした *Tyndale's Pentateuch* の言語研究がおろそかになりがちであった。拙稿により、*Tyndale's Pentateuch* と欽定訳聖書の間には、原典の語順の受容に差があることが明らかになった。今後、データの範囲を拡大しデータの客観的な処理をすることによって、*Tyndale's Pentateuch* における原典の語順の受容の仕方を解明したい。

注

- 1) Kautzsch (1990: 386), Lambdin (1990: 238-39) 参照。Lambdin はこれを verbal hendiadys と呼んでいる。
- 2) Hashimoto (1998: 64) 参照。
- 3) Joüon (1991: 591) は、余剰目的語の機能は casus pendens に相当と述べている。
- 4) Lambdin (1990: 163) 参照。
- 5) Hashimoto (1998: 190) 参照。
- 6) Hashimoto (1998: 59-70) 参照。
- 7) Bruce & O'Connor (1990: 295-96) は casus pendens の機能は焦点 (focus) を置くことであると述べている。

引用資料

AV= *The Holy Bible, Contayning the Old Testament, and the New: Newly Translated out of the Originall tongues: & with the former translations diligently compared and reuised, by his Maiesties speciall co mandment. Appointed to be read in Churches.* 1611. London: Robert Barker.

- EWB= The Early Wycliffite Bible. *MS. Bodley 959 : Genesis-Baruch 3.30 in the earlier version of the Wycliffite Bible*. 5 vols. (ed.) C. Lindberg. 1959-1969. Stockholm: Almqvist and Wiksell.
- HB= *Biblia Hebraica*. (ed.) R. Kittel. 1977. Stuttgart: Deutsche Bibelstiftung.
- LWB= The Late Wycliffite Bible= *The Holy Bible: containing the Old and New Testament, with the Apocryphal Books in the earliest English versions made from the Latin Vulgate by John Wycliffe and his followers*. 4 vols. (eds.) J. Forshall and F. Madden. 1850; (repr.) 1982. New York: AMS Press.
- OEH = Alfric's Heptateuch= *The Old English Version of the Heptateuch: Alfric's treatises on the Old and New Testament and his preface to Genesis*. (ed.) S. J. Crawford. 1922. EETS. OS. 160 ; (repr.) 1969.
- TP= *Tyndale's Pentateuch = The Fyrst Boke of Moses Called Genesis, The Seconde boke of Moses, Called Exodus*, 1530. Malborow: Hans Luft.
- VUL = The Vulgate= *Biblia Sacra Iuxta Vulgatam Versionem*. 2 vols. (ed.) R. Weber. 1969. Stuttgart: Württembergische Bibelanstalt.
- EWB= The Early Wycliffite Bible= *MS. Bodley 959: Genesis-Baruch 3.30 in the earlier version of the Wycliffite Bible*. 5 vols. (ed.) C. Lindberg. 1959-1969. Stockholm : Almqvist and Wiksell.

引用文献

- Berlin, A. 1985. *The Dynamics of Biblical Parallelism*. Bloomington: Indiana University Press.
- Butterworth, C. C. 1941. *The Literary Lineage of the King James Bible 1340-1611*. Philadelphia : University of Pennsylvania Press.
- Foxe, J. 1563. *Actes and Monuments of These Latter and Perillous Dayes*. London: John Day.
- Kautzsch, E. (ed. & Enlarged) 1990. *Gesenius' Hebrew Grammar*. Oxford : Clarendon
- Hashimoto, I. 1998. 『聖書の英語とヘブライ語法』. Tokyo : Eichosha.
- Lambdin, T. O. 1973. (repr.) 1990⁹⁾. *Introduction to Biblical Hebrew*. London: Darton, Longman and Todd.
- Marsh, G. P. 1862. *Lectures on the English Language*. (ed. with additional lectures and notes) W. Smith. London: John Murray.
- Mozley, J. F. 1937. *William Tyndale*. London: Society for Promoting Christian Knowledge; New York : Macmillan.
- Pollard, A. W. 1911. *Records of the English Bible: the documents relating to the translation and publication of the Bible in English, 1525-1611*. London : Oxford University Press.
- O.E.D.= *The Oxford English Dictionary*. (eds) J. A. Simpson and E. S. C. Weiner einer. 1989²⁾. Oxford : Oxford University Press.